

地域産業の人材育成様式の変容：石川県伝統産業の技能形成に関する調査研究のために

著者	村田 昭治, 寺田 盛紀
雑誌名	北陸における自然的・人為的環境の総合的研究：昭和63年度文部科学省特定研究研究成果報告書
ページ	53-56
発行年	1989-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/33296

地域産業の人材育成様式の変容

——石川県伝統産業の技能形成に関する調査研究のために——

村 田 昭 治

寺 田 盛 紀

はじめに

人材形成及び労働力確保ということは、原材料・自然、資本、市場・輸送手段、技術導入・開発等と並び産業の成立・発展に関する基礎的条件であり、産業の人為的環境をなすものであるから、そのことに関する研究は地域産業論の一領域を構成する。また、人材形成問題は、言うまでもなく（産業）教育学の基礎的な対象領域でもある。

明治期以降の伝統産業に限っても、石川県では輪島塗の「塗師屋徒弟制」（若林P.72-73.）や九谷焼の陶工徒弟制（矢ヶ崎P.46.）等、同業組合規制下の親方＝徒弟間の養成契約による技能形成の広範な存在が知られている。そして、現在、加賀友禅の近年の「徒弟制」に関する研究（金沢大学人類学教室1983）が示すように、多くの伝統産業事業所は、明治20年創立の県立工業学校（高校）や金沢美術工芸大学、戦後の職業訓練校での窯業、漆芸、木工、染色等に関する工芸教育の展開という事実の前で、身分制的教育関係や長期の基礎技能訓練を欠いた新たな「徒弟制」によって後継者育成に対応している。

昭和49年（1974年）の「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（伝産法）は、後継者育成を含めた産地での振興事業への助成を意図したものであるが、石川県の有力な伝統産業は法指定を受ける前後から各種の後継者育成策を講じ、基本的に成功させてきたのである。

本報告では、このような石川県地域における伝統産業後継者の技能形成のしくみと技能伝達の方法を歴史的、かつ実態的に明らかにしていくため、予備作業として、主要伝統産業の1つである漆器業の後継者補充に関する問題を概略的に示そうと思う。

1. 石川県の伝統産業と漆器業

まず、石川県の伝統産業及びその中での漆器業の現状について、素描する。表1は、62年現在の伝産法の指定を受けた工芸品業界の概況である。他に、31種の小規模の未指定品目もある。生産額に関して、全国における位置を見ると、山中漆器は漆器生産第1位、輪島塗は第3位（木製だけでは第1位）、加賀友禅は染色部門で第3位、九谷焼は陶磁器部門で第8位、金沢箔は全国の98%を生産し圧倒的に第1位という状況である。

これら伝産法指定産業の生産額は全工業生産額の数%であるが、第3次産業

や県の経済全体に与える影響はかなり大きい。特に、漆器業は他の産業以上に観光産業と深く結びついており、また、産地経済を支えている。

2. 漆器業の就業・後継者補充をめぐる状況

次に、『輪島漆器業産地診断報告書』(1984)と『山中漆器製造業産地診断報告書』(1987)から漆器業の就業・後継者補充をめぐる状況を概括する。輪島漆器業は製造販売業者(旧塗師屋)主導で木地による高級漆器生産の技法を守り、山中漆器業は問屋主導でプラスチック地漆器の量産を行っていることを念頭に置く必要がある。

(1) 家族就業

a. 輪島の家族就業依存率を見ると、経営者及びその家族は、集計企業 315 (総従事者1,612 人)の内、漆器製造業で24.5%(276 人)、木地業で68.6%(70 人)、加飾・呂色業64.9%(74人)、加飾・沈金業86.6%(110 人)、加飾・蒔絵業67.9%(95人)となっており、全体で38.8%である(P.95.)。製造業の経営家族依存率が低いのは、下地、研ぎ、上塗、沈金、蒔絵、呂色という全製造部門の中で研ぎ部門がほぼ100%(243人)女子就業部門になっていることに加えて、事務・営業従業員(310 人)が含まれているからである。その他の熟練分野は、概ね、3分の2が家族就業に依っている。

b. 山中の家族従事者は、集計企業93社(1,133 人)の内、問屋が16%(132 人)、木地が63%(28人)、塗装が76%(23人)、下地が90%(10人)、蒔絵が42%(17 人)、成型が23%(52人)、上塗が76%(10人)、全体で24%(272 人)である(P. 52.)。輪島と同様、事務・営業をかかえる問屋と熟練度の低いプラスチック成型部門の雇用従業員の多いことが目につく。

以上のように、輪島と山中に共通して、手作業と高度の熟練や芸術性を要求される分野が小規模家族経営に支えられていると言える。しかも、これらの部門なしに漆器業は成り立たないのである。

(2) 年令別就業状況から見た若年者補充の状況

a. 輪島の20歳代以下の就業者の割合は、製造業部門で28.7%(男243 人、女81人)木地業部門で21.5%(男21人、女1 人)、加飾業3部門で33.3%(男88人、女39人)である(P.96.)。

b. 山中の場合、家族・雇用従業員別、部門別に見ると、20歳代以下の者が、問屋家族の男12.7%(10人)、女7.5%(4人)、問屋従業員の男27.9%(71人)、女30.6%(120 人)、木地家族の男7.1%(1人)、女14.3%(2 人)、木地従業員の男12.5%(2 人)、女不就労、弱小部門の塗装、下地はほぼ不補充、同じく弱小部門だが蒔絵家族は男42.9%(3 人)、女10.0%(1 人)、蒔絵従業員は男75.0%(9 人)、女27.3%(3 人)、成型家族の男は14.8%(4 人)、女24.0%(6 人)、成型従

業員の男26.0%(26人)、女21.5%(14人)、上塗家族は不就労、上塗従業員は20歳代の男3人のみ就労(100%)である(P.54-55.)。

全体として、各々の熟練部門が一定の大きさを持っている輪島は30-40歳代と並ぶくらい、後継者補充が行われているが、山中の場合、ごくわずかの蒔絵と上塗を除き後継者補充が全くおこなわれていないかもしくは非常に少ない。

このような背景として、ここでは触れないが、輪島には漆芸技術研修所(1967年開設)や実業高校の木材工芸科(1970年創立73年からインテリア科)さらに、共同職業訓練施設として輪島漆器職業訓練運営会の普通1類(2年間,1966年より)、同2類(1年間,1977年より『労政訓練課事務概要』P.105.)が存在し、数多くの漆器業就職者を輩出していることに注目される(張間P.112-129.)。

それに対して、山中には、共同職業訓練施設として、山中漆器商工業協同組合の1類(1968年開設)があるものの、62年度不開講になっている(『概要』P.105.)。59年度より工芸科(窯業、染色、漆芸・金属工芸コース)を復活し(『県工百年史』P.369-370.)、主要伝統産業に対する学卒半熟練技能者供給体制を整えている県立工業高校の役割りは大きい。

(3) 後継者確保の見通しと確保できない場合の対応

それでは、今後の後継者補充の見通しはどのようなのだろうか。

50歳以上の経営者の回答を表2(輪島)、表3(山中)に示す。この間の補充がおそらくそうであったように、自分の子供に業を継がせるという方法で後継者は確保される。しかし、輪島の半数はその見通しが立っていないこと、また両地とも、自分の子供等の後継者がいない場合、廃業の見通しであると答えているのは非常に重大な事態と言わねばならない。

まとめ

輪島と山中は共通して、熟練度の高い分野が小規模家族経営に支えられている。そして、後継者確保がおぼつかず廃業の見通しにある事業所があまりにも多い。全産地的な後継者育成や経営の安定が望まれる。

しかし、両産地を比較すると、輪島の場合漆器製造の各部門の若年者補充が一定程度行われてきているが、山中の場合ごく一部に限られる傾向がある。漆器市場における特質や経営形態の相違があるとは言え、産地の後継者需要に直接答える職業教育・訓練施設が存在することの意味は大きいように思われる。

そこでの教育・訓練はどのような熟練需要に答えているのか、また産地企業や家族経営がどのようにして学卒青年を熟練に導いているのか、それらの詳細を今後の検討課題としたい。

(文責：寺田盛紀)

＜参考文献・資料＞

- 石川県立工業高等学校『県工百年史』1987.
 石川県商工労働部中小企業指導課『輪島漆器業産地診断報告書』(1984.3)、
 『山中漆器製造業産地診断報告書』(1987.3)
 石川県商工労働部労政訓練課『昭和63年度労政訓練課事務概要』1988.
 遠藤元男：『日本職人史の研究』1-6.雄山閣,1985.
 金沢大学文化人類学教室『現代に生きる伝統—加賀友禅の研究—』1983.12.
 北国文化事業団『伝統工芸と街づくり・金沢の試み』1980.3.
 張間喜一他『輪島漆器』北国出版社,1976.
 矢ヶ崎孝雄：『九谷焼』日本経済評論社,1985.
 若林喜三郎：「輪島漆器の生産組織」『金沢大学教育学部紀要』第1巻第1号(1952).

表1.伝統工芸品産業の概要(100年以上の歴史・手造り・伝統的製法)

工 芸 品 名	企業数	従業者数	生産額(百万円)			備 考
			59 年	60 年	61 年	
1 山 中 漆 器	950	5,000	33,000	35,000	33,000	50.5.10推定(木製4,000百万円)
2 輪 島 漆	687	2,411	14,000	14,000	14,000	50.5.10推定
3 加 賀 友 禅	243	1,488	14,306	14,801	15,019	"
4 九 谷 焼	452	2,450	7,500	7,500	7,500	"
5 金 沢 漆	290	994	5,480	5,680	5,636	52.4.8推定
6 金 沢 仏 壇	70	253	872	907	943	51.4.2推定
7 七 尾 仏 壇	78	202	833	835	850	53.7.23推定
8 金 沢 漆 器	61	105	450	450	450	55.3.3推定
計	3,031	12,903	76,441	79,173	77,398	

『61年度石川県商工要覧』P.138.

表2.輪島漆器業の後継者問題への対応 表3.山中漆器業の後継者問題への対応

項 目	加賀友禅業		木 地 業		加 賀 漆 業					
	業 数	継承比	業 数	継承比	名 数	比 率	業 数	継 承 比	業 数	継 承 比
い : ち	87	84.4	16	48.5	11	10	20	41	50.8	
(自分の子供)	(66)	(63.5)	(13)	(28.0)	(11)	(10)	(17)	(38)	(46.9)	
(それ以外)	(1)	(1.0)	(2)	(6.1)	(0)	(0)	(2)	(2)	(2.5)	
い な い	37	35.6	17	51.5	8	19	15	40	49.4	
(会社員等)	(2)	(1.9)	(0)	(0.0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0.0)	
(前 業)	(18)	(17.3)	(15)	(45.9)	(5)	(14)	(6)	(25)	(30.9)	
(今後育成)	(11)	(10.6)	(2)	(6.1)	(0)	(0)	(8)	(10)	(12.3)	
計	104	100.0	33	100.0	17	29	35	81	100.0	

項目	区別	問屋	木地	塗装	下地	髹塗	豆型	上地	合計
後継者がいる	23	6	1	1	1	9			41
(自分の子供)	(21)	(6)	(1)		(1)	(9)			(38)
(それ以外)	(2)			(1)					(3)
後継者がいない	3	2	4	1	3	1	2		15
(会社員等)									
(前 業)		(2)	(4)	(1)	(2)	(1)	(1)		(11)
(今後育成)	(3)				(1)			(1)	(3)
計	26	8	5	2	4	10	2		57

『輪島報告書』P.131.

『山中報告書』P.66.